

詩篇たどりつけない」のためのエスキス

ロクの来る日

脇川郁也

日だまりで毛繕いするロク
黒くまるまると太った野良だ
見慣れた景色の中にあるきれいな空が
クロネコの背にも乗っている
ロクの匂いを嗅ぎつけてか
お向かいに住むビーグル犬のソラちゃんが
けたたましく大きな声で仕事をする
夏みたいな日差しと回る風がさわやかな日

鼻先の白い毛が漱石の髭に似ていて
妻はロクを白ひげと呼んでいる
隣家でおやつに呼ばれるときは
ホワイトソックスの名で通っている
ロクの名とてぼくが勝手に付けたものだから
だれもほんとうのロクに出会うことはない

風が回っている
うっすらと汗ばむ肌を撫で
立ち尽くす木々のあいだをめぐり
消滅への道をただまっすぐに
ためらいながら進んでいく

もう一匹
目

つきの悪い黒い野良猫がいて
ときどきうちの庭を横切っていく
髭もないし白い靴下もはいていないから
そいつを
ろくでもない猫
と呼ぶ
口からもれる頼りないことばが
かよわい手ざわりだけを残している

ロクが来た日は

何かいいことがありそうな気がして

中空を見上げてみるけれど

彼岸に吹きわたる風が

心配を消してただ回っているだけ

いつまでたってもぼくの声は届かず

どこまで行ってもたどりつけない

そこらじゅうにいる黒い猫は

帰る家を忘れてしまったロクとぼくだ

むかしに見送った小さないのちも

初夏の緑の中でころころとはしゃいでいる